

狐女房

泉州信太の森、そこに今もある鏡池には「葛の葉」の伝説が残されています。

安倍保名が妻の全快と子を授かるようにと信太大明神（聖神社）に祈願した際、一匹のネズミが走ってくるのを目にした。このネズミは獵師に追われて負傷した白狐が姿を変えたもので、保名は袖に隠して逃がしてやった。後に白狐は女人の姿で現れ、葛の葉と名乗って保名の妻になり男子を授かった。それから数年後、男子が三歳になったとき、葛の葉は狐の正体を見破られ

恋しくば 尋ねきてみよ 和泉なる 信太の森の うらみ葛の葉

この歌を残して信太の森に帰っていく。そして、伝説ではこの男子こそ、後に陰陽師の祖、天文博士としてその名を知られる安倍晴明だと語られるのです。

聖神社の祭神・聖神は日を知る、すなわち暦を司る神で、朝廷の暦を司った土御門家に繋がっていた。土御門家は古代からの陰陽五行の陰陽道を伝える公家で、安倍晴明の流れだといわれる。晴明はもちろん平安期の朝廷の天文博士で陰陽師である。中世から近世になると、土御門家の暦が聖神社の民間陰陽師によって庶民の間にも広められるようになる。彼らは聖神社に仕える寺人で身分は決して高くはなかった。彼らが住んでいた信太の森の麓からみると、聖神社は丘の上に聳えていたに違いない。そうなのです。彼らが、自分たちの祖先は古代の陰陽師の安倍晴明だと語るとき、「狐女房」という、哀しい物語を紡ぎだす必要があったのでしょう。

